

「現地を訪問して想うこと」 A岩手県コース

～津波てんでんこの教えに、自らに問う～

文学部日本文学科卒業

早藤(旧姓田中)佐枝

“津波てんでんこ”とは、「津波が来たら、周囲の者に構わず、てんでんばらばらに逃げよ」という教えです。然しながら、実際には、保育園に子供を迎えに行き、帰ってこなかった母親や、自宅に残した年老いた両親を心配して戻ってこなかった息子やら、多くの方が犠牲になりました。

そして、私も若い双子を持つ母親として、その場にいたら、「津波てんでんこ」の教えを守れなかったであろう一人です。他人事ではなく、自らも命を失ったかもしれない一人です。子どもを想う、親を想う、その気持ちを前に、津波時の心得の重要さは良く理解できても、現地に立つと、「自分ならどうできたか」と、複雑な思いでした。

陸前高田市でバスを降りると、そこには人が行き交う街の姿があったことが信じられないほど、何もありませんでした。地面が露出し、そこを草が覆い、かろうじて残る線路に、駅の跡と察せられます。実際に被災された校友のお話を聞き、私は重苦しいため息に包まれました。「3日間は食べ物を口にする気がしなかった」－生き残った方々の想像を絶する被害に、虚無感を覚えるのみです。被災地ガイドの方が言いました。「町がすっぽり消えたんです」。一帯はその通り、風が吹き抜けるのみ。被災地を訪れ、一生付き合っていく問題を、突き付けられた思いです。忘れないこと、思い続けることでしか、答えは出ないでしょう。

現地では皆様方、お世話になりました。被災地で亡くなられた方々のご冥福をお祈り致します。